

〈周縁〉精神分析考

——アルゼンチン精神分析論のために——

林みどり HAYASHI Midori

1. アルゼンチン精神分析との出会い

その日わたしはレコレータ広場に面したカフェに座り、冷たい南風がハカランダの枝を大きく揺らすのを眺めながら、グロリアの「恋人」の話聞いていた。父親ほどに年の離れた相手のことを彼女は「わたしの精神分析家」と呼んでいた。「わたしの」という所有格と「精神分析家」という職名の組み合わせに、当時のわたしは奇妙な居心地の悪さを覚えたものだが、そればかりではない。大学で知り合ったばかりの異邦人に「恋愛話」を聞かせた言い訳のように、突如真顔になって肩をすくめると、「そうはいつでも、転移と逆転移で引き起こされた陽性感情にすぎないかもしれないんだけどね」と独りごつように呟いて、話を切り上げたのである。

転移と逆転移。いずれも精神分析療法の過程で患者と治療者のあいだで起きる感情転移を意味する用語で、前者はクライエントから治療者へ、後者は治療者からクライエントに対して向けられる感情反応をさす。このときグロリアは、「恋人」への恋愛感情がカウンセリングの過程で生じた情動的な反応にすぎないかもしれないという不安を、ほとんど初対面のわたしにむけて吐露したことになる。ちなみに彼女は分析家でも心療の専門家でもない。どこにでもいる文学好きの学生である。しかも話していたのは、屋下がりのカフェでの他愛ない恋バナにすぎなかった。いわば女子トーク的な日常会話に、唐突に差し挟まれた「転移」と「逆転移」という精神分析の専門用語は、わたしを面食らわせるのに十分だった。このとき感じた戸惑いを、その後のブエノスアイレス生活で幾度か思い出すことになる。

当時わたしは19世紀アルゼンチンの文化・思想史を研究するた

めに、ブエノスアイレス大学の歴史学研究所に籍を置いていた。たかだか本を読むためだけに地球の反対側まで行ってひとり暮らしをしていたに等しいわけで、何につけ効率が優先される現在からすれば、いつの時代の話かと首を傾げるむきもあろう。めざましいメディア環境の進歩と効率主義が生活環境になったいま、学位をとるといった明確な目的もなく研究対象の国に何年か滞在し、ただ漫然と街を歩きまわり、本を渉猟し、研究所の図書室に通い、映画を見、研究会や集会に出て友人たちと雑談したり議論したりするなど、非効率このうえない無駄のように思われるかもしれない。たしかにあのころ図書館や文書館に足繁く通って読んだ本や、古書店から古書店へ探しまわってようやく手に入れることができた雑誌が、いまでは日本にいながら Google ブックスで一発検索でき、かなりの稀少本も現地の本屋から取り寄せ可能になった。やろうとおもえば調査相手へのインタビューさえ、web 会議ツールを使って実現可能な時代になった。

だが、これもまた月並みの常套句ではあるが、やはり直接現地にいってみたいとわからないことが山ほどある。目的志向的な行動から排除されてしまう出来事——タクシー運転手とのやりとりや、偶然耳に入ってくる隣のテーブルの人たちの会話、伝統的な本屋の奥のカウンターにかならずといていいほど座っている博識な老書店員との立ち話、立ち食いピザ屋のテレビ画面、キオスクの店先に積まれている大衆雑誌、街中で見かける映画ポスターや看板、地下鉄構内に流れている AM ラジオ、路上に舞っているアジビラ——との遭遇。じつにどうでもいい日常的なインタラクションから、研究対象の社会や文化をめぐる問いが生まれてきたりするのである。ひとつの研究課題や研究テーマのきっかけは、小さな違和感や気づきの積み重ねのなかにあるとわたしは思う。〈アルゼンチン精神分析〉との出会いの場合もそうだった。

一見無為な留学先でのひとり暮らしのなかで、わたしがアルゼンチンの、というよりブエノスアイレスという街に生きる人々に特有の——「転移」という言葉に象徴される——思考の「癖」のようなものに気づくまでに、さほど時間はかからなかった。事あるごとに開かれるペロニスタ（ポピュリズム政党「ペロン党」の支持者）の集会で叩かれるボンボ（大太鼓）の音や、過去の軍事独裁政権下での人権侵

害加害者を告発するグラフィティに、耳も目も慣れはじめた頃のことである。あるときわたしは、ブエノスアイレスの都市文化に遍在する精神分析の巨大なプレゼンスにいまさらながら気がつき、それまで意識化できなかったこと自体に驚いた。あらためて注意して周囲を見回してみると、それまで何気なく通りすぎていた駅のキオスクには、精神分析やサイコセラピーの大衆向け雑誌が置かれ、本屋のショーウィンドウにはフロイトやラカンの新しい伝記が並べられて、通行人たちが見入っている。テレビをつければ著名な精神分析家がトーク番組のホストをつとめていて、ゲストの女優とエディプス・コンプレックスについて話している。ラジオでは分析家によるリスナー・カウンセリングがオンエアされていて、タクシー運転手が熱心に耳を傾けている。映画や演劇の脚本やキャストには、脚本家や俳優と並んで分析家が名を連ねているのである。

メディアや文化産業での露出にとどまらない。精神分析のプレゼンスは日常生活の端々に感じ取ることができた。精神分析の用語を借用したネオロジズムが良い例である。アルゼンチンでは、「ヒステリー」(histeria)に由来する動詞“histeriquear”や、「サイコパス」(psicópata)を動詞化した“psicopatear”といった俗語が人口に膾炙し、ティーンエイジャーから主要な全国紙にいたるまで広く用いられている。どちらもスペイン王立アカデミー辞典には収録されていない隠語の一種で、言語学的には「アルゼンチン語」に分類されている¹。国境を接するウルグアイやチリを別とすれば、同じくスペイン語を使用する他のラテンアメリカ諸国やスペインではほとんど使われていないらしい。

中産階級に限らず、精神分析はアルゼンチン社会の幅広いセクターで現実のさまざまな側面を理解するための解釈体系になっているとされるが、これらの言語使用にもそれは現れている。グロリアとの会話のなかに異物のように差し挟まれた「転移」といった言葉や、「転移」というタームに表されている彼女自身のメタ認知も、こうした文脈でなら理解することができる。アルゼンチンのどの町でも、人々が集う社交の場で「無意識」や「エディプス・コンプレックス」を否定しようとするのは、カトリック神父の前でマリアの処女懐胎を否定するのと同じようなものだという冗談があるそうだが、あながち誇張ではないのかもしれない²。

アルゼンチンの文化空間に、これほどにも精神分析が浸透したのはいつからなのか。フロイトによって創始された知や実践は、どのような経緯をたどって現地社会に広く受け入れられるようになったのか。前置きが長くなったが、わたしが考えたいのはこの点である。とはいえ、問いそのものの考察に入るためには、取りあげるべき主題や領域が広すぎる。さしあたり本論では、アルゼンチンの精神分析を考えるに際してのウォームアップ的考察を行う。

2. アルゼンチン精神分析の現在

日本ではほとんど知られていないが、アルゼンチンは世界有数の精神分析大国である³。人口比に占める分析家の数は世界で最も多く、2014年の時点で人口10万人につき200人以上存在している。同じく2番目に多いフィンランドが57人、ノルウェーが54人であるのを見れば、アルゼンチンの突出ぶりがわかるだろう⁴。一方、アルゼンチン国内での分析家の偏在ぶりは著しく、全体の4割強が首都ブエノスアイレス市に集中している⁵。市内には分析家のオフィスが集中することから、俗に「フロイト村」(Villa Freud)と呼ばれる地区があるほどで、ブエノスアイレス市が「精神分析の都」や「世界の精神分析の首都」という異名をとるゆえんである。

国際的にみてもアルゼンチンの分析家のプレゼンスは高い。1910年にジークムント・フロイトによって創設された「国際精神分析協会」(Internatioal Psychoanalytical Association、以下IPA)は、全世界に1万2000人の正会員と5500人の訓練候補生を抱え、70以上の加盟団体を傘下に持つ世界最大の精神分析の団体だが、2022年の時点で、アルゼンチン国内の6つの精神分析協会・学会がIPAに加盟し、その半数がブエノスアイレスに拠点を置いている。また、初代会長カール・グスタフ・ユング以降、IPAの歴代会長は欧米出身の男性に限られてきたが、初めて欧米圏以外からIPA会長を輩出し、また初の女性会長を送り出したのは、いずれもアルゼンチンである⁶。

アルゼンチンは、スペインや他のラテンアメリカ諸国の精神分析運動に大きなインパクトを与えたことでも知られている。たとえばIPAにアフィリエイトしたブラジルの精神分析第1世代がトレニ

ングを受けたのは、ヨーロッパではなくアルゼンチンにおいてであった。1942年に創設されたアルゼンチン精神分析協会（Asociación Psicoanalítica Argentina、以下APA）は、他のラテンアメリカ諸国での精神分析協会の設立に深く関わった。ウルグアイ精神分析協会は事実上APAの支部として機能し、メキシコ精神分析協会は長年にわたりAPAの監督下にあった。スペインでは、1970年代に亡命してきたアルゼンチン人分析家たちによって、初のラカン派精神分析協会が創設された⁷。

近年では、精神薬理学的な処方や認知行動療法の広がりを受けて、時間と費用がかかり「実験的有効性を欠く」とされる精神分析は、衰退しつつあるというのが世界的な趨勢らしい⁸。だが、すくなくともアルゼンチンの状況を見るかぎり、必ずしもそうとは言えないようだ。2011年から翌年にかけての調査によれば、ブエノスアイレスの公立病院では精神治療の半数以上が精神分析によって行われ、残る4割も部分的に認知療法を取り入れてはいるが、基本的には精神分析の手法を用いた折衷法がとられている。精神分析は依然として精神療法の主流でありつづけているのである⁹。

アルゼンチンにおける精神分析の浸透ぶりは、諸外国のメディアから驚きをもって受け止められてきた。2009年10月19日の『ウォール・ストリート・ジャーナル』紙は、「GDPが落ち込んでもアルゼンチンは国民一人当たりの分析家の数で世界をリードする」と題する記事を掲載し、アルゼンチンにおける精神分析の商業的成功について報じている¹⁰。スタジオの寝椅子に横たわった大物スターを分析するリアリティ番組の人気や、ラジオのセラピー番組やウェブ配信を通じての視聴者からのレスポンスの多さ、精神分析のトークツアーの成功、精神分析症例集のベストセラー等々、精神分析家ガブリエル・ロロンの稼業が、「ロックスター並みの人気」を誇っていること。ロロン流のメディア露出や精神分析の大衆化に対しては他の分析家からの風当たりが強いが、メディア化された精神分析は、アルゼンチン社会が抱える「喪失と苦痛」に対処するために有効であるとのロロンの反論が紹介されている。

他方、ここ数年のコロナ禍は、ブエノスアイレスのセラピー環境を一変させた。2020年7月21日付けのコロンビアの新聞『エル・ユニベルサル』紙電子版は、ロックダウンのもとでのセラピー実践を

取り巻く困難について報じている¹⁾。ブエノスアイレスでは同年3月20日から11月9日まで厳しいロックダウンが課された。外出禁止措置命令を受けて、住民は電話やオンラインによるセラピーを余儀なくされた。記事ではじっさいにリモートセラピーを受けている人々の声が紹介されている。46才のロミナ・カイラは、自閉症の4才の娘と71才の母親を抱え、自身も心臓と腎臓に病気を抱えているので外に出ることはできない。パンデミック前は毎木曜に心理士に会っていたが、ロックダウン中は自宅のトイレの便座に座って音声通話でカウンセリングを受けている。それでも「まったくなくなってしまふより、電話であっても45分間のセッションを受けられるほうがずっとまし」という。人材派遣会社を経営する37才のマリアナ・フェブレは、リモートワークと子育てのかたわら、ガレージに止めた車の中やマンションの非常階段に座ってセッションを受けている。医学生のソフィア・アサルはビデオ通話で分析を受けているが、家族と同居しているので、分析家と「ふたりきり」になるためにテラスに出たり、寝室に閉じこもって家族に聞かれないよう小声で話したりしなければならない。wifiの信号が着いたり消えたりするたびに、治療者の顔がフリーズしたり自分の顔がひどいものになるので、そのつど絶望的な気分になるという。

いずれのクライアントにも共通しているのは、ドアを閉め切って分析家と「ふたりきり」になれるカウンセリング室でのリラックスした環境を、心底恋しがっていることである。一方、治療者は別の理由から対面での治療の必要性を強調している。IPA会員の分析家マリア・イネス・ソテロによれば、バーチャル・セッションに慣れて治療者-クライアント間の絆の維持や転移が可能になれば、一定の効果は現れる。しかし根源的な治療に至るためには、本来的に「そこにいること」(presencialidad)は絶対条件である。ロミナ・カイラを診ているマリア・クララ・ベニテス・カアマーニョは認知行動療法の専門家だが、電話での治療には限界があるという。リモート・セラピーではすべての身ぶりや身体的な動きを「読む」ことができず、身ぶりや動きをつうじて患者が伝える苦痛の「読解」を行うことができないからである。カアマーニョによれば、強い鬱状態や摂食障害、恐怖症に苦しむ人たちにとって、治療者の直接的な現前は必要不可欠である。

アルゼンチン応用社会心理学研究所のアンケート調査によれば、メンタルヘルス指標のマイナス度は全測定値のなかで最も大きく、7割近くの人が新型コロナによるメンタルヘルスの悪化を訴えている。ネガティブな感情・認知の上位5項目は、「不確かさ」、「心配」、「焦燥」、「悲嘆」、そして感染ならびにパンデミックが長期化することへの「恐怖」である。また、8割以上の分析家や心理士が外来診療を再開すべきであると主張している。ロックダウン解除後は対面診療が再開されたが、パンデミックの経験がアルゼンチンのセラピー文化にどのような影響を与えたかについては、今後の状況をつぶさに見ていかなければならないだろう。

3. 「問い」としてのアルゼンチン精神分析

「精神医療の先進地域とはいいがたいラテンアメリカの一国に、なぜ精神分析などという近代的な治療の技が深く根づいたのか」。新聞・雑誌やインターネット上のメディアでこれまで何度もくりかえされてきた問いである。

これに対しては、紋切り型の理由付けがなされてきた。ひとつはアルゼンチンの国民形成の歴史に理由を求める「国民気質論」。もうひとつは、アルゼンチンの政治・経済的な浮沈の激しさに理由を求める「社会反映論」である。前者は19世紀末の歴史に原因を求め、後者は20世紀の社会状況に原因を求めている点で違いはあるが、どちらも素朴な〈アルゼンチン特殊論〉を前提としていることに変わりはない。そこからは、「なぜ他でもない精神分析なのか」——他の療法や宗教ではなく——、「なぜアルゼンチンなのか」——同じような移民国や政治・経済の不安定な国があるにもかかわらず——という基本的な問いが欠落している。

最も多く見かけるのは「国民気質論」である。例をあげよう。たとえば、日本で唯一アルゼンチンの精神分析を扱った著作『精神分析の都——ブエノスアイレス幻視』のなかで、筆者である比較文学者の大嶋仁は次のように記している¹²。

旧大陸での精神分析への文化上の抵抗は、新大陸ではあまり

見られなかった。とくにニューヨークやブエノス・アイレスのように、種々雑多な人種が次から次へと移民して来たような雑居地域では、ユダヤ人だけでなく非ユダヤ人までもが精神分析を喜んで受け入れるという事態が起こったのである。それは、伝統のない自由な新社会には旧社会の偏見がなかったから、ということではない。むしろ、移民やその子孫たちが、旧世界の伝統から離脱した一方で、新大陸にも馴染めぬ宙ぶらりんの人間となったこと、その宙ぶらりんの状態が彼らをして言い知れぬ孤独と不安に陥らせた、ということによるのである。精神分析は、そういう社会と伝統を喪失した不安定な個人に、一種の自己構築作業を施すことで、心的安定を与える役目を果たしてきたのである¹³。

さらにこうした国民的心性の表現を、タンゴのリリズムと結びつけて次のように述べている。

土着の文化が跡形もなく消え、西欧文化の断片ばかりが散在するこの環境、当然、精神的空白感と不安感を深刻化する。後に捨てた故郷への中途半端な未練、新天地で経験した幻滅の悲哀……これらが繰り返しタンゴで歌われるのも、もつともである。タンゴこそはポルテーニョ（ブエノスアイレス人）的な心情の表現である。[中略] 社会的絆の脆弱なブエノス・アイレスのようなところでは、自己はタガのはずれた浮遊物になりやすい。広い空間に勝手に投げ出され、勝手に振る舞う個人の群れ。いかにも自由に見えるが、個人としての限界あるいは境界線が見定めがたく、自己が勝手に膨張し、容易に狂気に陥るのである¹⁴。

根無し草性からくる「孤独と苦痛」がアルゼンチン人の国民性を構成しているとの見方は、ホルヘ・ルイス・ボルヘスをはじめとするアルゼンチンの文学者や文化人によって広く支持されてきた。別離や喪失を歌い上げるタンゴを根無し草的な国民的心性と同一視する見立ては、ひとつの文化的クリシェになっているといい。大嶋は、20世紀初頭からアルゼンチン社会に根強く存在してきたナ

ルシシスティックな国民文化論を、精神分析に安易に繋げているのである。もっとも、これは大嶋独自の見方というわけではない。国の内外を問わず多くの分析家が国民気質と精神分析を関連づけてきた¹⁵。アルゼンチンの精神分析はメランコリックな国民心性と結びつけられ、タンゴと結合して、いまや文化産業の体をなしているのである¹⁶。

しかし、アルゼンチン精神分析の「国民気質論」を支える歴史認識には、根本的な錯誤がある。アルゼンチンの精神分析史に詳しい思想史家マリアノ・B・プロトキンが指摘しているように、精神分析による治療実践が本格的に社会に広がったのは、1950年代後半の精神医療システム改革や大学改革が実を結んだ、1960年代以降のことである。精神分析が広がった理由を19世紀末に生じた移民流入による社会変動に求めるには、いささか時間的距離があきすぎている。また、アルゼンチンで精神分析の思想的な受容が始まったのは1930年代に入ってからのことである。1910年代から20年代にかけて精神分析を受容したペルーやブラジルなどと比べて、アルゼンチンでの受容時期は遅かった¹⁷。もし移民社会の形成によって生じた「宙ぶらりんの状態」が精神分析浸透の理由であるとするなら、アルゼンチンでの受容がペルーやブラジルより遅れた事実の説明がつかない。

仮に「宙ぶらりんの状態」からの救済を求めてアルゼンチン人が精神分析を受け、それが精神分析の広がりにつながったと仮定して、なぜ他の知的・精神的な体系ではなく精神分析だったのか。同様に「宙ぶらりんの状態」が生じたはずの他の移民国で起きなかった現象が、なぜアルゼンチンでは生じたのか。他のラテンアメリカ諸国に遅れて受容したにもかかわらず、なぜアルゼンチンは精神分析の「先進国」になったのか。アルゼンチンで精神分析が広く実践されてきた理由を探るためには、こうした問いが必要不可欠なはずだが、「国民気質論」はこれらの問いによって開かれる言説圏域を閉止に追い込み、思考停止を招いてしまう。

同じことが「社会反映論」についてもいえる。アルゼンチンは1920年代までは近代化の優等生だったが、1930年代以降は政治・経済的な浮沈を繰り返し、軍事政権と文民政権がめまぐるしく入れ替わる不安定な政治状況がつづいた。社会的な不安定さから、アル

ゼンチン人は自然と精神分析を必要とするようになったというのが「社会反映論」の主旨である。先の『ウォール・ストリート・ジャーナル』紙の記事のなかで、分析家ロロンは、アルゼンチンが「精神分析のナンバーワン」である理由として、アルゼンチンの政治が極端に二極化し、貧富の差が激しくなったことに加え、「グローバル経済に奉仕するために米国との虐待的な関係を耐えなければならなかった国」である点をあげている¹⁸。心理士アンヘリカ・アルファロ・リオやジャーナリストのジョー・ゴールドマンは、アルゼンチンが経験してきた経済的・社会的な盛衰の激しさが人々をノイローゼに追いやり、心理的な助けを必要とさせてきたと述べている¹⁹。しかし、仮に社会的な激変が理由であったとして、やはり先にあげた問いへの応答が要請されるはずだ。なぜ精神分析だったのか。なぜ同様の状況にあった他国では起きなかったのか。むしろこの場合重要なのは、政治的・経済的な困難のゆえではなく、様々な困難にもかかわらず、精神分析が支持されつづけた所以ではなからうか。だが、「社会反映論」は「国民気質論」同様の思考停止をもたらしてしまう。

問われなければならないのは、アルゼンチン精神分析という「現象」を問題化するときに、ほとんど自動的といっている仕方で、〈アルゼンチン特殊論〉が指定されてしまう理由である。アルゼンチンはその移民の歴史のゆえに、また政治・経済的な不安定さのゆえに本質的に精神分析的であるとする前提は、おのずと次の命題を指定してしまう。すなわち、アルゼンチンにおける精神分析の発展は、アルゼンチンという「他なる存在」に内在する特殊な問題であって、他の国々との比較は不可能である。アルゼンチン国民が移民一世から代々受け継いできた情動的な気質や、特殊な社会環境から獲得した情動反応が、彼らをして衝動的に精神分析に向かわせるのであるから。アルゼンチン精神分析は、はじめからアルゼンチン国民のリビディナルな情動によって構成されていたというわけだ。

しかし、それでは「アルゼンチン精神分析」の内実は飛び越されてしまい、フロイト思想がじっさいにどのように受容されローカルな知として作り直されたかという問題領域は抑圧されてしまう。その意味で、アルゼンチン精神分析の「国民気質論」や「社会反映論」は、アルゼンチンにおける精神分析のダイナミズムを思考せず

ませるための思考停止装置、ないしはアルゼンチンの精神分析をめぐる問いの圏域を、精神分析の言説領域の外部に排除するための言説装置として機能しているのである。

4. アルゼンチン精神分析史研究が拓く可能性

精神分析史の余白に書き込まれたエキゾチックな「症例」としてではない仕方、アルゼンチンの精神分析を取りあげることはできないだろうか。またそこにはどのような意義があるだろうか。精神分析の主流な理論や学派を生みだした側からではなく、精神分析を受容した側から見ることによって、これまでとは異なる精神分析史研究の視座を得ることはできないだろうか。紙幅も尽きてきたので、最後にひとつの可能性を示しておきたい。

まずは従来の精神分析史の叙述の特徴を確認しておこう。プロトキンの分類に従えば、主な精神分析史語りは大きく3種類に分かれる²⁰。最も多いのは「人物史」的な語り、とくに「精神分析の父」フロイトの伝記を精神分析の歴史と重ねる叙述である。よく知られるように、この人物史語りを創始したのはフロイト自身である。1914年という早い時期に書かれた「精神分析運動の歴史のために」のなかで、フロイトは自分自身を精神分析の創造主と位置づけ、精神分析の歴史をフロイト個人の受難の歴史と重ねて叙述した²¹。社会から加えられる圧力に抗する孤高の「抵抗者」としてフロイト＝精神分析を描く叙述は、生涯を通じた友人で同僚のアーネスト・ジョーンズによる『フロイトの生涯』などにも共通している²²。2番目は精神分析の誕生を可能にしたウィーンの文化的・社会的・政治的状况を強調する「文脈主義」である。カール・E・ショースキーの『世紀末ウィーン——政治と文化』がその代表で、政治的な挫折がフロイトの精神分析への内向を促したとする見方をとる²³。3番目は精神分析を精神力動の系譜に位置づけるもので、アンリ・エレンベルガーの異彩を放つ労作『無意識の発見』に代表される²⁴。

フロイトが提唱して以来、標準的に用いられるようになった「精神分析運動」という表現に象徴されているように、多くの場合、これらの精神分析史は、欧米の分析家や精神分析を歴史の行為主体と

して描いてきた。精神分析的な知や実践の広がりや、歴史的行為主体が坐すウィーン（のちにロンドン）から〈周縁〉各国への影響力の波及として捉えられた。権威的な〈中心〉が〈周縁〉に知を授け、〈周縁〉での知的・実践的努力の成果が〈中心〉に還元されて、〈中心〉が管理する知のアーカイヴはいっそう肥え太る、といった具合にである。

欧米を主体とするこうしたコロニアルな構造の精神分析語りに対して、精神分析を受容した〈周縁〉からの精神分析史叙述は、異なる視点を可能にする。たとえばアルゼンチンでの精神分析を考える際には、起点をどこにおくかという問題をまず最初に提起せずにはおかない。系譜学的探査を行ったエレンベルガーを別とすれば、欧米中心の精神分析史では、起点を問うこと自体想定外だ。フロイトが精神分析の起源であることは自明の理だからである。しかし、アルゼンチンではそうはいかない。たとえば、APAが担う正史語りによれば、ローカルな精神分析に端緒がつけられるのはAPAが創設された1942年である²⁵。しかし、分析家で歴史家のウーゴ・ベセッティの指摘にあるように、精神分析家が誕生する以前の時点で、すでに「フロイト思想」(freudismo)はアルゼンチンの医療や文学などの領域で語られ、大衆雑誌などをつうじて社会の幅広い層で受容され、多様な領域に根を下ろしていた²⁶。フロイト思想は、あるときは厳密科学のひとつとして、あるときには伝統的・日常的な世界観と近代知を繋ぐ結び目として自由に読まれていたのである²⁷。

APAが推奨してきた正史語りは、APAの発展とアルゼンチン精神分析の進展を同一視し、APAを中心に精神分析的な社会を空間的に再配置しようとしてきた。いうまでもなくその構図は、APAが仰ぎみる精神分析の世界的中心であるIPAが作りだした、コロニアルな〈中心-周縁〉語りの再演に他ならない。しかし現実には、APAの影響力は知識人層のごく限られた領域に閉じられていた²⁸。APAの発展史だけでアルゼンチン精神分析の発展・浸透を説明するのは、事実上不可能である。アルゼンチンの精神分析のダイナミズムを理解するためには、APAだけでなく、APAの制度の外部でフロイト思想がどのように読まれ、いかなる知の回路で現地の医療システムと結びつき、誰のどのテキストを通じて文学や芸術の領域に浸透したのか、どのような媒介項によって翻訳・翻案されたことによって下層

中産階級の人々に受け入れられたのか、といった点が明らかにされなければならない。理論や実践の移動がもたらした複数性や「間-性」(betweenness) が刻印されている以上、アルゼンチン精神分析は、たったひとつの起源には還元されえないのである。

また、現実世界の政治的暴力に対するIPAの徹底したデタッチメントに象徴されているように、精神分析の政治的中立性を厳命したフロイト以降、〈中心〉の精神分析語りは、精神分析と政治の結びつきについてほとんど語ってこなかった。ジャック・デリダはこれを厳しく批判した。1981年にパリで開かれた「フランス=ラテンアメリカ会議」の講演のなかで、デリダはアルゼンチンの軍事独裁政権下(1976-1983)での苛烈な人権侵害を念頭に置きつつ、強制失踪や拷問に代表される政治的暴力と精神分析が共存する領域を「精神分析のラテンアメリカ」と呼び、精神分析はその領域に降り立たなければならないと主張した²⁹。デリダが過たず示唆しているように、アルゼンチンから精神分析を見ることは、精神分析が本来結んでいるにもかかわらず抑圧してきた政治との密接な関係を前景化せずにはおかない。軍事独裁政権との関係だけではない。ペロニズムの経験や新左翼運動の広がりのおかげで、フロイトの社会学的な読みやマルクス主義的な読みが深められ、現地の政治理論や運動、精神分析のリベラルな実践へと繋げられた。ラカンやアルチュセールはローカルな政治言語へと翻訳・翻案され、変化の激しい現地の政治や社会を理解するための理論的な武器として援用され、たえず検証されなおした。のちにラカニアン・レフトとして知られることになるエルネスト・ラクラウが、この時期のアルゼンチンを席捲した政治運動や理論の経験を出発点としていたことを想起してみれば良い³⁰。現在では、アルゼンチンから開始された「グローバル・サウスからのフェミニズム」運動の理論家や人権組織のメンバーらが、ラクラウやドゥルーズの受容をつうじて自分たちの運動理論を構築している³¹。

アルゼンチンは精神分析を消費しただけで、精神分析の主流となる理論や独自の学派を生みださなかったから、精神分析史の枠外に置いて良いとする見方は、専門家のあいだに広く潜在している³²。だが、アルゼンチンの精神分析が新たな理論や学派を生まなかった事実は、精神分析の受動的な受容者であったことを意味しない。ア

ルジュン・アパデュライが言っているように、「消費のあるところ快樂があり、快樂のあるところ行為性^{エージェンシー}がある³³」。精神分析を受容した〈周縁〉から考えるということは、いいかえれば受容者側における知の消費が生み出す「快樂の行為性」、その「プリコラージュ的戦術」(セルトー)を探究することにほかならないのである。

デリダのひそみに倣えば、「アルゼンチン精神分析」ではなく「精神分析のアルゼンチン」が探究されなければならないのかもしれない。精神分析が散種された地域において、大文字の政治だけでなく小文字の政治と精神分析の関係を明らかにしていくこと。〈周縁〉での精神分析のダイナミズムを明らかにすることによって、〈中心〉の行為主体の軌跡によってだけではない、オルタナティブな精神分析のカルトグラフィを描くことができるのではないか。ひいてはこれら一連の作業を通じて、〈中心〉の正史語りによって排除され、抑圧されてきた、心的なものをめぐるグローバルな知の営みに光を当てることができるのではなかろうか。

注

- 1 ス페인語アカデミー協会のラテンアメリカ俗語辞典web版によれば、“histeriquear”は「もったいぶったり逡巡するふりをして媚びを売る」を意味する自動詞でアルゼンチンに特有の俗語である (<https://www.asale.org/damer/histeriquear>)。一方の“psicopatear”はアカデミックな事典には収録されていないが、インターネット上のさまざまなサイトで定義や使用方法についての議論が開かれており、「良心の呵責を感じることなく、他者を操って利を得ようとする」ことをさすアルヘンティニスムとする説が有力のようだ (<https://forum.wordreference.com/threads/psicopatear.431677/>)。
- 2 Plotkin, Mariano Ben, Freud in the Pampas. *The Emergence and Development of a Psychoanalytic Culture in Argentina*, Stanford: Stanford University Press, 2001, p. 1.
- 3 アルゼンチンでは、精神分析の実践者の多くは“psicoanalista” (精神分析家)ではなく“psicólogo/a” (心理士)の肩書きをもっているが、実質的に両者は同一と考えて良い。これには歴史的な事情がある。1940年代末、フランスのソルボンヌ大学で心理学教授をつとめていた精神科医・精神分析家ダニエル・ラガーシュが、精神分析にもとづく心理学講座を制度化し、従来の医学的精神分析とは異なる、人文学の領域での精神分析の発展可能性に道筋をつけた。アルゼンチンでは、1955年の軍事クーデタで生まれた軍事政権下で「精神衛生学」の近代化が進められ、その過程でラガーシュ流の精神分析に基づく心理学構想が全面的に受容された。心理学への精神分析の導入に主導的役割を果たした精神分析家ホセ・ブレヘルの影響下で、アルゼンチンでは精神分析的心理学が制度化され、1960年代以降、改良主義的な精神医学の実践領域に受け入れられた。こうしてアルゼンチンの“psicólogo/a”は、精神分析家と同様、精神分析学理論に基づく療法を実践す

- る「精神分析的心理士」(psicólogo-psicoanalista)として位置づけられるようになった。Dagfal, Alejandro, María Eugenia González, “El psicólogo como psicoanalista: Problemas de formación y autorización,” *Intersecciones Psi*, Año 2, Número 5, diciembre 2012, pp. 12-14.
- 4 Alonso, Modesto M., Doménica Klinar, “Los psicólogos en Argentina. Relevamiento cuantitativo 2014,” Poster presentado en el VII Congreso Internacional de Investigación y Práctica en Psicología, XXII Jornada de Investigación y 11º Encuentro de Investigadores de Psicología del Mercosur, Buenos Aires: Facultad de Psicología, Universidad de Buenos Aires, 2015.
 - 5 Alonso, Modesto M., Paula T. Gago & Doménica Klinar, “Profesionales de la psicología en la República Argentina. Síntesis cunatatitativa 2008,” *Anuario de Investigaciones*, 17, 2010, p. 380.
 - 6 初の非欧米圏出身のIPA会長はアルゼンチン出身のオラシオ・エチェゴジェン(Horacio Etchegoyen, 1993-1997年)、初の女性会長は同じくビルヒニア・ウングアル(Virginia Ungar, 2017-2021年)である。
 - 7 Plotkin, *Freud in the Pampas*, pp. 1-2.
 - 8 精神分析の窮状については以下に詳しい。ルディネスコ、エリザベート(信友建志・笹田恭史訳)『いまなぜ精神分析なのか——抑うつ社会のなかで』洛北出版、2008年。
 - 9 Muller, Felipe, María Carolina Palavezzati, “Modelos teóricos y práctica clínica en hospitales públicos de la ciudad de Buenos Aires,” IV Congreso Internacional de Investigación y Práctica Profesional en Psicología, XIX Jornadas de Investigación, VII Encuentro de Investigadores en Psicología del Mercosur, Buenos Aires: Facultad de Psicología, Universidad de Buenos Aires, 2012, pp. 148-150. 臨床現場での学派別では、ラカン派が23.9%、フロイト派が21.6%で、52.3%が両理論を組み合わせている。
 - 10 Moffett, Matt, “Its GDP Is Depressed, but Argentina Leads World in Shrinks Per Capita,” *Wall Street Journal*, Oct. 19, 2009.
 - 11 “Argentina tiene más psicólogos por persona que Finlandia o EE.UU.,” *El Universal*, 21 de julio de 2020.
 - 12 大嶋の『精神分析の都』はブエノスアイレスでの分析セッションの経験にもとづくエッセイ集だが、それはそれとして興味深い点がないわけではない。『精神分析の都』では、記憶を扱う技＝精神分析の経験を通じて保持しえた〈記憶〉が、後日、想起を介して記述されるという二重の過程を経て、「精神分析の都」という思念的な都市が構築されている。大嶋自身が受けた精神分析のセッションというきわめて個人的な経験を通して、ブエノスアイレスが「幻視」されるのである。その結果、意識の底から浮かび上がって切り取られるディテールのひとつひとつは、「精神分析の都」という、不在の「全体」のメトニミーとして機能することになるのだが、分析家によって呼び起こされた大嶋の〈記憶〉と、そこで想起された〈記憶〉のレトロスペクティヴな諸断片には、いやおうなく〈他者〉の痕跡が残されることになる。畢竟記憶とは〈他者〉からの呼びかけに他ならず、〈他者〉の感覚そのものであるというミシェル・ド・セルトーの指摘を、本書は彷彿とさせずにはおかない(セルトー、ミシェル・ド(山田登世子訳)『日常の実践のポイエティック』筑摩書房、2021年、225-228頁)。だが、おそらくはまさにそのゆえに、つまり記憶に特有の移ろいやすさや〈他者〉の痕跡への「抵抗」として、大嶋は本書の冒頭で「国民気質論」という凡庸な「物語」を準備しなればならなかったのかもしれない。
 - 13 大嶋仁『新訂増補 精神分析の都——ブエノスアイレス幻視』作品社、1996年、11

頁。

- 14 同上、14-15頁。カッコ内は引用者。
- 15 ロサリオ市にラカン派の拠点を作ったアルゼンチンの分析家プラ・H・カンシーナは、精神分析のオンライン雑誌『アチェロンタ』のなかで、アルゼンチンに精神分析が広く浸透した理由として、「移民一世から後の世代まで綿々と受け継がれてきた根無し草性の効果」をあげている（Cancina, Pura H., “Práctica del psicoanálisis en la Argentina,” *Acheronta: Revista de Psicoanálisis y Cultura*, Número 16, diciembre 2002）。フランスの歴史家・精神分析家のエルザベス・ルディネスコは、移民によって構成されたアルゼンチン国民は「亡命のアイデンティティ」を作り上げなければならず、それが後に精神分析が根づいた土台になったと述べている（“Es en Buenos Aires donde surge la idea de que todo el mundo debe psicoanalizarse y no porque esté enfermo,” *infobae*, Buenos Aires, 9 de septiembre de 2017）。
- 16 タンゴと精神分析を関連づけた新聞・雑誌やブログ、書籍は枚挙に暇が無い。文化センターや図書館でのイベントも盛んである。たとえば2016年7月にはアルゼンチン国立図書館で「文学、文芸、精神分析、タンゴ」と題された講演会が開催され、精神分析家ネストル・ヒブレが、タンゴと精神分析の結びつきについて講演し好評を博した。講演の様子は以下のYouTubeで見ることができる。<https://www.youtube.com/watch?v=6NgThkkFCT8>。2017年6月にはロサリオ市立「カサ・デル・タンゴ文化センター」で、タンゴの実演と精神分析を論じたイベント「苦しむ、愛する、出発する——タンゴと精神分析」が開かれた（「苦しむ、愛する、出発する」は有名なタンゴの一節）。
- 17 Plotkin, *Freud in the Pampas*, pp. 6-8.
- 18 Moffett, art. cit.
- 19 Smink, Veronica, “Argentina, reino del diván,” *BBC Mundo*, Argentina, 22 de octubre, 2009.
- 20 Plotkin, Mariano, “Introduction,” Mariano Plotkin ed., *Argentina on the Couch. Psychiatry, State, and Society, 1880 to the Present*, Albuquerque: University of New Mexico Press, 2003, pp.15-16.
- 21 フロイト、ジークムント（福田覚訳）『精神分析運動の歴史のために』『フロイト全集』第13巻、岩波書店、2010年、43-114頁。
- 22 ジョーンズ、アーネスト著、ライオネル・トリリング、スティーヴン・マーカス編（竹友安彦、藤井治彦訳）『フロイトの生涯』、紀伊國屋書店、1964年。
- 23 ショースキー、カール・E（安井琢磨訳）『世紀末ウィーン——政治と文化』、岩波書店、1983年、230-262頁。
- 24 エレンベルガーは、西欧世界に生まれた力動精神医学の系譜を非西欧世界の土着医療やヨーロッパの抜魔術などのより広い文脈に位置づけており、フロイトの正典化を免れていてユニークである。エレンベルガー、アンリ（木村敏・中井久夫監訳）『無意識の発見——力動精神医学発展史』上・下、弘文堂、1980年。
- 25 Aberastury, Arminda, Marcelo Aberastury & Fidiás Cesio, *Historia, enseñanza y ejercicio legal del psicoanálisis*, Buenos Aires: Omega, 1967.
- 26 Vezzetti, Hugo, *Aventuras de Freud en el país de los argentinos: De José Ingenieros a Enrique Pichon-Rivière*, Buenos Aires: Paidós, 1996, pp. 7-12.
- 27 Plotkin, Mariano Ben, “Tell Me Your Dreams: Psychoanalysis and Popular Culture in Buenos Aires, 1930-1950,” *The Americas*, Vol.55, No.4, April 1999, pp. 601-629. Vezzetti, Hugo, *Freud en Buenos Aires 1910/1939*, Buenos Aires: Puntosur, 1989, pp. 11-38.
- 28 Plotkin, *Freud in the Pampas*, Chap.2.

- 29 デリダ、ジャック「地精神分析——「そして世界の残り物」」ジャック・デリダ（藤本一勇訳）『ブシュケー——他なるものの発明』1、岩波書店、2014年。ラカン研究者の工藤顕太は、「ロボ事件」（軍政下のブラジルで分析家が拷問に加担していた事件）を参照しつつ、デリダの「精神分析のラテンアメリカ」をブラジルのケースとして読み替えている。工藤顕太「精神分析運動の政治史のために——ベルリン、リオ・デ・ジャネイロ、パリ」『思想』no.1167、2022年7月、66-87頁。
- 30 ブエノスアイレス大学時代、ラクラウはペロニズム系の前衛社会主義政党で活動する傍ら、文学や精神分析を論じる左派前衛誌『コントロール』の編集主幹や、精神分析に造詣の深い社会学者ヒノ・ヘルマーニの右腕として活躍した。
- 31 アルゼンチンの新しいフェミニズム運動については以下参照。林みどり「身体-領土の潜勢力——五月広場の母たちからNiUnaMenosへ」『福音と世界』8月号、2021年、12-17頁。
- 32 たとえば、立木康介編著『精神分析の名著——フロイトから土居健郎まで』中央公論新社、2012年、9頁。
- 33 アバデュライ、アルジュン（門田健一訳）『さまよえる近代——グローバル化の文化研究』、平凡社、2004年、26頁。

参考文献

- Aberastury, Arminda, Marcelo Aberastury & Fidas Cesio, *Historia, enseñanza y ejercicio legal del psicoanálisis*, Buenos Aires: Omega, 1967.
- Alonso, Modesto M., Doménica Klinar, “Los psicólogos en Argentina. Relevamiento cuantitativo 2014,” Poster presentado en el VII Congreso Internacional de Investigación y Práctica en Psicología, XXII Jornada de Investigación y 11º Encuentro de Investigadores de Psicología del Mercosur, Buenos Aires: Facultad de Psicología, Universidad de Buenos Aires, 2015 (https://www.modestoalonso.com.ar/asset/trabajos/2014_los_psicologos_en_argentina_relevamiento_cuantitativo.pdf, Retrieved Oct. 24, 2022).
- Alonso, Modesto M., Paula T. Gago & Doménica Klinar, “Profesionales de la psicología en la República Argentina. Síntesis cunatatitativa 2008,” *Anuario de Investigaciones*, 17, 2010, pp. 375-382.
- “Argentina tiene más psicólogos por persona que Finlandia o EE.UU.,” *El Universal*, 21 de julio de 2020 (<https://www.eluniversal.com.co/salud/argentina-tiene-mas-psicologos-por-persona-que-finlandia-o-ee-uu-EX3145530>, Retrieved Sep. 10, 2022).
- Cancina, Pura H., “Práctica del psicoanálisis en la Argentina,” *Acheronta: Revista de Psicoanálisis y Cultura*, Número 16, diciembre 2002 (<https://www.acheronta.org/acheronta16/argentina.htm>, Retrieved, Nov. 5, 2022).
- Dagfal, Alejandro, María Eugenia González, “El psicólogo como psicoanalista: Problemas de formación y autorización,” *Intersecciones Psi*, Año 2, Número 5, diciembre 2012, pp. 12-18.
- “Es en Buenos Aires donde surge la idea de que todo el mundo debe psicoanalizarse y no porque esté enfermo,” infobae, Buenos Aires, 9 de septiembre de 2017 (<https://www.infobae.com/cultura/2017/09/09/es-en-buenos-aires-donde-surge-la-idea-de-que-todo-el-mundo-debe-psicoanalizarse-y-no-porque-este-enfermo/>, Retrieved Nov. 1, 2022).
- Moffett, Matt, “Its GDP Is Depressed, but Argentina Leads World in Shrinks Per

- Capita,” *Wall Street Journal*, Oct. 19, 2009.
- Muller, Felipe, María Carolina Palavezatti, “Modelos teóricos y práctica clínica en hospitales públicos de la ciudad de Buenos Aires,” IV Congreso Internacional de Investigación y Práctica Profesional en Psicología, XIX Jornadas de Investigación, VII Encuentro de Investigadores en Psicología del Mercosur, Buenos Aires: Facultad de Psicología, Universidad de Buenos Aires, 2012 (<https://www.aacademica.org/000-072/236.pdf>, Retrieved Sep. 10, 2022).
- Plotkin, Mariano Ben, “Tell Me Your Dreams: Psychoanalysis and Popular Culture in Buenos Aires, 1930-1950,” *The Americas*, Vol.55, No.4, April 1999, pp. 601-629.
- , *Freud in the Pampas. The Emergence and Development of a Psychoanalytic Culture in Argentina*, Stanford: Stanford University Press, 2001.
- , “Introduction,” Mariano Plotkin ed., *Argentina on the Couch. Psychiatry, State, and Society, 1880 to the Present*, Albuquerque: University of New Mexico Press, 2003.
- Smink, Veronica, “Argentina, reino del diván,” BBC Mundo, Argentina, 22 de octubre, 2009 (https://www.bbc.com/mundo/cultura_sociedad/2009/10/091021_0042_argentina_divan_irm, Retrieved Nov. 18, 2022).
- Vezzetti, Hugo, *Freud en Buenos Aires 1910/1939*, Buenos Aires: Puntosur, 1989.
- , *Aventuras de Freud en el país de los argentinos: De José Ingenieros a Enrique Pichon-Rivière*, Buenos Aires: Paidós, 1996.
- アパデュライ、アルジュン（門田健一訳）『さまよえる近代——グローバル化の文化研究』、平凡社、2004年。
- エレンベルガー、アンリ（木村敏・中井久夫監訳）『無意識の発見——力動精神医学発展史』上・下、弘文堂、1980年。
- 大嶋仁『新訂増補 精神分析の都——ブエノスアイレス幻視』作品社、1996年、11頁。
- 工藤顕太「精神分析運動の政治史のために——ベルリン、リオ・デ・ジャネイロ、パリ」『思想』no.1167、2022年7月、66-87頁。
- ショースキー、カール・E（安井琢磨訳）『世紀末ウィーン——政治と文化』、岩波書店、1983年。
- ジョーンズ、アーネスト著、ライオネル・トリリング、スティーヴン・マーカス編（竹友安彦、藤井治彦訳）『フロイトの生涯』、紀伊國屋書店、1964年。
- セルトー、ミシェル・ド（山田登世子訳）『日常の実践のポイエティック』筑摩書房、2021年。
- 立木康介編著『精神分析の名著——フロイトから土居健郎まで』中央公論新社、2012年。
- デリダ、ジャック「地精神分析——「そして世界の残り物」」ジャック・デリダ（藤本一勇訳）『ブシュケー——他なるものの発明』1、岩波書店、2014年
- 林みどり「身体・領土の潜勢力——五月広場の母たちからNiUnaMenosへ」『福音と世界』8月号、2021年、12-17頁。
- フロイト、ジークムント、（福田寛訳）『精神分析運動の歴史のために』『フロイト全集』第13巻、岩波書店、2010年。
- ルディネスコ、エリザベート（信友建志・笹田恭史訳）『いまなぜ精神分析なのか——抑うつ社会のなかで』洛北出版、2008年。